

河内金剛寺新出の鎌倉時代書写

『医心方』巻第十三について

東野治之

一、緒言

永観二年（九八四）、丹波康頼によって撰せられた『医心方』は、現存最古の医書であるのみならず、唐以前の医書・本草書を集成したものととして、広く東洋文化史上、逸することのできない著作である。本書の古写本としては、仁和寺本、成實堂本（半井家伝来、巻二二のみ）などの存在が知られていたが、近年、半井家本の残余全巻も世に出るに至った。ただ現在のところ、中世以前の写本は上記以外にほとんどなく、⁽¹⁾比校の資料に乏しいのを憾みとしてゐる。ところが奇しくも、河内の古刹、金剛寺（大阪府河内長野市所在）の蔵儲中に本書巻第十三の残冊が存在する。ここにそれを紹介して、『医心方』研究の一資料としたい。

二、現状

問題の残冊は、書名を明らかにせぬまま、医薬関係の書として伝えられたものであるが、その内容や、僅かに存する巻

首内題の残画(図1参照)よりみて、『医心方』の残欠であることは疑いをいれない。末尾に若干の欠葉があるため、奥書等の存在は確認できないが、書風や傍訓の形などから、書写年代は鎌倉時代前期を降らないと判断される(傍訓については第四節参照)。いまその品質・形状を略記すれば左の通りである。

紙本墨書 綴葉装 料紙楮紙

縦二六・一 cm 横一六・〇 cm

一頁八行(但し末尾二頁は十二行) 一行二〇字前後 押界あり

界高二一・六 cm 界幅一・九〜二・〇 cm

まま本文と同筆で墨の傍訓を付す(他に加點はない)。当初の白絹綴糸も残存

総じて蠹蝕甚だしく、保存状態はよくないが、残された手掛りから原状を復元してみると、もとは第一折と第二折が五紙、第三折が七紙からなり、三折をもって一冊としていたと考えられる。現在、第一折の一紙(表紙及び九丁の分)、第三折の一紙半(三三二丁、三三三丁の分)を失っている。

三、伝来

金剛寺は行基の草創と伝えるが、その寺史が明確になるのは平安末期のことである。治承二年(一一七八)、後白河法皇の帰依をうけた阿観上人が金堂を造立し、当寺を高野山の別院として再興した。その後中世を通じ、真言宗の大寺院として広大な所領を維持し、南北朝時代には南朝方の拠点となった。正平九年(一三五四)以後、ここが南朝に人質となった北朝の三上皇や後村上・長慶両天皇の御座所となったこともある。このような事情のため、正平十五年(一三六〇)には北朝方に攻められて兵火を被った。

この写本の伝来事情は全く不明であるが、真言宗の古寺院には、醍醐寺・真福寺のように往々外典の古写本を蔵すると

ころがあることからすれば、この写本も古くから当寺に伝存した可能性がある。

しかし一方、金剛寺には、明らかに後代の移入にかかる典籍も存在する。たとえば藤原基衡の発願になり久安四年（一一四八）の奥書をもつ紺紙金泥法華経卷八などは、その好例といえよう。高野山へは近世初頭に中尊寺経が移されているが、この経なども、観心寺所蔵のものと共に、その一部であったとみられる。従って上述のこととは逆に、『医心方』写本がはるか後代に当寺に入ったことも充分考えられよう。その場合注意されるのは、金剛寺の寺領が建久九年（一一九八）三月以降、仁和寺を本所と仰ぐようになり、寺自体も仁和寺北院の末寺と称せられるようになったことである。仁和寺の『医心方』平安末期写本は有名であるが、金剛寺における『医心方』写本の存在も、仁和寺本と何らかの関わりがあるかも知れない。⁵⁾ただ両写本の間直接の関係は認めにくく（この点は次節参照）、現状ではやはり伝来不明としておくのが妥当である。

なお金剛寺の典籍類については、従来完全な調査がなされているとはいえず、目録等も備わっていない。従って今回報告した写本が全くの零冊か否かは不明である。これについては、金剛寺当局の御理解を得て、今後の調査を期したいと考える。

四、内容

金剛寺の残冊は、単に卷十三の古写本として珍しいばかりでなく、同じ卷十三を存する半井家本（便宜その複製である安政版による）と比較しても差異がみうけられる。たとえば目録部分を対比すると、まず安政版の目録は次のようになっている（加筆訂正されている文字については、もとの字を原「一」のように注記した）。

治虚劳五劳七傷方第一 治虚劳羸瘦方第二

治虚劳梦泄精方第三 治虚劳尿精方第四

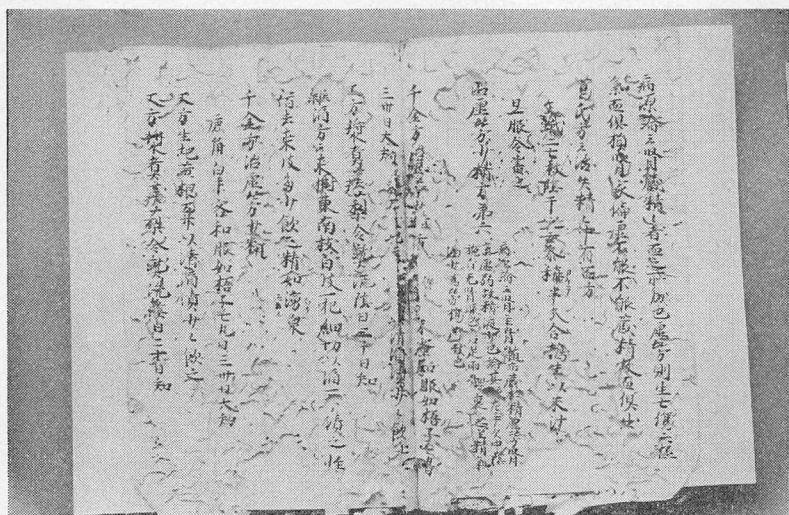


図 3 金剛寺本『医心方』第14丁裏, 第15丁表

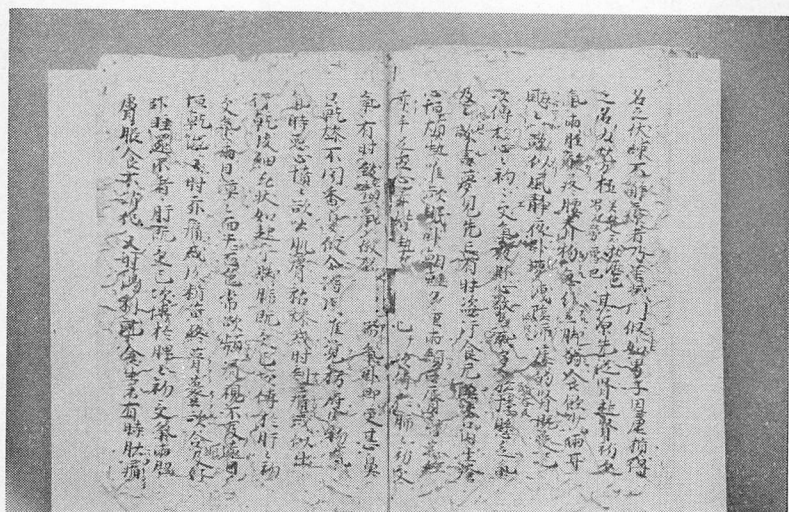


図 4 同上第23丁裏, 第24丁表

治虚劳精血出方第五 治虚劳少精方第六

治虚劳不得眠方第七 治昏塞喜眠方第八

治陽虚汗出方第九 治陽虚盜汗方第十

治風汗方第十一

治耶傷汗血方第十二

治骨蒸病方第十四

金剛寺本も、「第十」までは同じとみられるが、「第十」の次に行間書入があり、左のようになっている(図1参照)。

汗出方第九

汗方第十一

汗方第十一

安政版も金剛寺本も共に混乱はあるが、金剛寺本は訂正を受ける前の半井家本の文に近い。

本文では、金剛寺本「治虚劳少精方第六」の下に、半井家本にない『病源論』の引用書入れがあるのが目立つ(図3参

照)。その文は次のようなものである。

病源論云腎主骨髓而藏於精虚劳腎氣虚弱故精液少也論其脈左手欠中陰施者无腎脈也若足兩髀裏急主精氣渴少為劳傷

所致也

『医心方』では、おおむね各項のはじめに『病源論』からの引用文が置かれている。ここはその体例に則る意味で、『病源論』の文が補われたのであろう。この個所で特に行間の余白が多くとられていることからみて、『病源論』の補入が、金剛寺本の書写後行われたものでないことは明白である。少なくともこの引用は既に金剛寺本の底本に存在したと判断される。ただこのような補入が、それ以前のどの段階でなされたのかは今後に残された問題である。

その他、金剛寺本は、半井家本に校合されている宇治本の字句とも相違点があり、半井家本や宇治本など従来知られているテキストとは、全く別系統の写本とみてよいであろう。仁和寺本との関係も問題であるが、仁和寺本に卷十三がないため、直接の比較は不可能である。ただ金剛寺本の書写の体裁は仁和寺本と異なっており、少なくとも仁和寺本の忠実な写しから出たものでないことは認めるべきであろう。

また先にもふれたが、金剛寺本には本文と同筆で音訓の仮名や送り仮名がまま施されており、他にやはり同筆で反切や漢字による字義の注記もわずかながら存在する(図4参照)。それらの数は半井家本に比べればはるかに少ないが、仮名の字形は、「ツ」「ワ」の末画が短く、「ル」の末画が撥ねないこと(図3・4)、また「アラ／＼」の豊符が「ラ」の右中央からはじまること(図2)など、鎌倉前期の特色をよく示すものといえる。⁽⁷⁾この種の傍訓などは、底本を踏襲する場合は多いから、字形がそのまま書写年代を示すといえない面もある。しかし金剛寺本には全体として底本を謹直忠実に書写しようとした風はなく、むしろかなり自由な気分で写されている感が強い。従って仮名の字形の示す年代がほぼ書写年代に近いとみて大過なからう。

五、結語

以上によって明らかのように、残冊とはいえ金剛寺本は、『医心方』の校勘や写本系統を考える上に不可欠の価値を有する。金剛寺本の内容が、『医心方』の研究に広く利用されることを願うとともに、その重要性に鑑みて、しかるべき保存措置のとられることを希望したい。

注

(1) 小曾戸洋「漢方古典文献概説(9) 医心方」(現代東洋医学五―四)、同『医心方』卷二・四の異本群について(日本医史学雑誌

三一―二) 参照。

(2) 以下金剛寺の歴史については、魚澄惣五郎「河内天野山金剛寺の沿革」(『古社寺の研究』所収)による。

(3) 水原堯栄編『高野山見存藏経目録』(高野山学志第二篇)、田中槐堂『日本写経綜覽』三九三頁参照。

(4) 前注の水原氏『目録』によれば、高野山の中尊寺経には、年記を異にするものの基衝願経も含まれている。金剛寺の基衝経は、観心寺現蔵の中尊寺経の場合と同様、高野山より移された可能性が強いと思われる。

(5) 仁和寺本について、石上英一氏は、もと丹波家伝来のもので、他の医書類と共に戦国末期に高山寺心蓮院に預けられ、それが仁和寺心蓮院に引きつがれたと考えられている。石上英一『大日本史料』医心方撰進条の編纂(昭和六十年十月六日医心方研究発表会発表要旨)、『大日本史料』第一編之二十一、一七六頁・二八二頁。

(6) 仁和寺本は、一頁七行で書写されている。

(7) 仮名の字形の時代判定については、小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』二〇九頁以下、同「踊字の沿革統紹」(広島大学文学部紀要二七一一)、同『大理圖書館善本叢書 平安詩文殘篇』解説』参照。

(一九八五年九月二十一日稿、同十月十八日補訂)

(大阪大学教養部助教授)

〔追記〕

最近後藤昭雄氏から頂いた御教示によると、歴史地理三三一六(大正八年六月)の彙報欄に黒板勝美氏による金剛寺の史料採訪報告が転載されている(『文学博士黒板勝美氏の史料採訪報告書』)。この中で黒板氏は、院政時代の書写とみるべき『医心方』巻第十三の存在を指摘されているが、これはここに紹介した写本そのものであろう。従ってこの写本発見の功は黒板氏に帰せられるべきで、その存在も「新出」とはいえなくなるが、黒板氏の簡単な報告以後、この写本が学界に注目された形跡はなく、近年の東大史料編纂所による採訪報告(『東京大学史料編纂所報第十七号、昭和五十七年』)でも「医書」とあるのみである。また黒板氏の年代推定にも賛同しがたい。ここでは再発見の意味をこめて投稿時のままとすることにした。読者諸賢の御了解をお願いするとともに、御教示下さった後藤氏に厚く御礼申し上げたい(一九八六年七月十七日、初校時に記す)。

Newly-Found Kamakura Period Manuscripts of the “ISHINHO” Vol. 13 in the KONGO Temple

by

Haruyuki TONO

The “Ishinho” is known as the oldest extant medical work in the medical history of Japan. There exist numbers of manuscripts known today, but pre-medieval examples are very rare. The newly-found medieval MS. owned by the Kongo temple in Osaka Prefecture was heretofore unknown in the academic world. It is a one volume copy from the “Ishinho” Vol. 13, although part is omitted, and is considered as having originated in about the middle of the thirteenth century.

By comparing its contents and format with other known MSs., it has been confirmed that there are no other MSs. of the same genealogy. This newly-found MS. would contribute greatly to the study of the MS. genealogy of “Ishinho” and its revisions.